

『市立ノアの方舟』(佐藤青南/祥伝社)

書店員レビューの抜粋

- ・入園者の減少が続く野亞市立動物園。報復人事により、取り壊しの議題にのぼってもおかしくない動物園に園長として就任することになった磯貝はまったく動物園の知識がない人間だったが、娘の行動を後押しされて、積極的に園の変革のために動いていく。だけど職員たちは不信や諦念など、必ずしも磯貝の動きに好意的な者ばかりではなかったが、園に生きる動物たちを鏡にして、おのれと向き合いながら、考え方を変えていく。その動物園の姿をノアの方舟にたとえて、最後の頑なだったひとりが舟に乗った時、再生へと向けて出発します。物語の先に想いを馳せたくなるような一冊でした。普遍的な魅力があり、きっと読み終えた時、多くのひとが前向きな気持ちになれる、と思います。
- ・廃園間近の動物園の新米園長と飼育員たちの物語。動物に関して素人の園長に反発する飼育員たちですが、動物の幸せとは何かという課題を共有しつづつ改善していくところが醍醐味です。動物の生態も興味深く、温かく前向きな気持ちになれました。
- ・楽しい読書体験でした！崖っぷち動物園の再建に挑む、ドタバタ素人園長と個性的な飼育員、さらには知られざる動物たちの特性。彼らの熱意あふれる様々な挑戦に、今日も明日も頑張る勇気が湧いてきます！
- ・明るい気持ちになれるお仕事小説でした。読んだ後、似てるところはないですが、自分の仕事について考えてしまいました。第二章がいちばん心に残っています。キャラクターとしては森下さんがお気に入りです。
- ・動物たちを想像しながら読めて癒された。飼育員たちが動物が好きで向き合っているところと、本が好きで働いている書店員と気持ちが共通していて励まされた。
- ・動物園にかかわる人たちへの綿密な取材に基づいたと思われる群像劇が、物語のしっかりした構造の中で描かれている。勉強になりました。あらためて動物園に行ってみようと思う読書もいるはず。
- ・自分が好きなことを仕事にする辛さと喜び、両方感じられて共感しまくりでした。根底にある気持ちは同じでも向いている方向が違う人たちに次第に熱が伝わり、それが広がっていくのが感じられて、私の心も熱くなりました。情熱はきっと誰かに伝わる、そう信じられる1冊です。
- ・それぞれが問題を抱える中で、現実と折り合いをつけながら、人間も動物も少しでも

良い方向に進もうと生きる姿が愛しく、勇気を貰える物語だった。

・廃園寸前の動物園を立て直していく園長と職員のお話。最初は反発する職員も、園長の姿勢に心打たれ、職員と園 자체が変わっていくところに感動しました。登場人物も個性豊かで面白く、動物について色々知れて興味深かったです。ホッキョクグマの回が特に好きです。

・知的好奇心すぐる動物の知らなかった生態の面白さと、ひたむきに動物と向き合う飼育員たちの葛藤は、動物園への興味がぐんと高まる一冊でした。幼いとき以来足を運んでいない動物園、この物語を読んだ後では見え方が違ってきそうです。

・動物の声に耳を澄ます。人間と動物たちの関係をつうじて、大切なことは何かをじっくり考えさせられました。動物園の裏側や役割、飼育員の思い、動物の生態などがまっすぐに心に響き、忘れる事のできない一冊になりました。そして、知るということの面白さ、大切さを改めて感じました。動物って、面白い！！

・赤字動物園の復活を目指すお仕事ものとして面白いのはもちろん、各エピソードの人間ドラマが素晴らしかったです。心が温かくなって、泣きました。物語を通して、現実でも頑張ろうという気持ちにさせてくれる小説でした。

・働いている人たちにとっては動物園だって日常。そんな動物園のありふれた日々が新園長の登場で少しづつ変わっていく。お仕事小説でもあるし、飼育員さんたちを通して感じるのはやっぱり動物たちへの愛でもある。どんな環境でも職場でも諦めたら終わり、それは全てに通じることだと物語を通して実感しました。迫る足音、最高ですね。

・命ってすごい。

表紙もいいし、これは大賞の帯を巻いて仕掛け展開をしたら売れそう！ タイトルを変えたい気持ちもあるくらい、可能性を感じました。学びとエンタメが両立した北陸のみんなで推したいと思った一冊。

・動物園とそこにたまたま派遣してきた名前だけの園長。その園長の奮闘記が感動的で、実に勉強になる。著者の佐藤さんの取材奮闘の物語でもあるのでしょうか。

・動物園の立て直しを目指すお話で、そのための奮闘も面白かったけど、動物の生態のことや動物園の裏側を知ることが出来たのもとても興味深く読みました。読んでる内に段々と園の動物たちにも愛着が沸いてきて、飼育員さんの動物への愛情も伝わってすごく好きな物語でした！